

成人向
同人誌

18歳未満の
購入・閲覧禁止

ほくと

リーザお姉ちゃん



BOKU TO
LIEZA ONECHAN

リーザおねえちゃんは
ぼくのあこがれの人
ホルンの村に住んでる
魔法使いで、
すごいハンターでもあるんだ
美人でスタイルもいいし
とっても優しい



ぼくの名前はリッツ
ホルンの近くのラムールの町に住んでる
おねえちゃんとはホルンのつり橋で
出会ってから、
ロマリアの悪いやつを懲らしめたり
つかまつた人たちを助けたりで
一緒に冒険したんだ

おねえちゃんには
悪いロマリアから
世界を守るために旅してる
アトクつて人たちの仲間でもある
ラムールが危なかった時も
ぼくたちを守るために
戦ってくれた

やがておねえちゃんは
仲間たちと行ってしまった
おねえちゃんと離れるのは
さびしかったけど…でも
おねえちゃんと約束したんだ
ぼくはおねえちゃんの故郷を守るって

ぼくもきつと強くなって
おねえちゃんがいつでも
帰ってこられようにつて、
そう思ったんだ

あれからのくくらい
経つただろうか…
ぼくは壊されたホルンの村の
復興のお手伝いする日々を
送っていた

そんなある日
ラムールへ買い物しに
もどる途中、ぼくは

村のはずれで
思いがけないものを見た

長い髪に
優しい笑顔

それはリーザ
おねえちゃんだった

リッツ！

おねえちゃん！

トテテ

ふふっ
ただいま

なんと

おねえちゃんが帰ってきた！
聞けばハンターのお仕事で

しばらくの間ここに

滞在することになったんだって

ぼくはとても嬉しくなった

おねえちゃんは

相変わらずきれいだった

長くてきれいな髪

優しい声に笑顔。スタイルは…

なんだか前より良くなったのかも

ぼくはドキドキしてしまった

ガキ

ホルの

おねえちゃんの家はまだ
直してる途中なので

おねえちゃんには

ぼくの家

泊まってもらうことにした

けっこう散らかってたけど…

おねえちゃんのベッドは

急いできれいにした

これなら気持ちよく

使ってもらえるかな

おねえちゃんが来た夜
その日は夜更かしして
おねえちゃんとお話した
おねえちゃんのいない間の事や
おねえちゃんからも
旅の事をいっぱい聞いた
真夜中になっても、
ずっとお話してた

「もう寝ないとダメよ」
おねえちゃんに言われたけど、
ぼくはなんだか嬉しくて、
ドキドキして全然眠くなかった
おねえちゃんは少し困った様子ながらも
結局ずっとぼくに付き合ってくれたんだ

明け方近くまで、
ぼくたちはたくさんお話した



一緒に朝起きて
一緒にホルンにお手伝いに行ったり
一緒に買い物したりした
ぼくたちはいつも一緒に過ごした

おねえちゃんに
ご飯を作ってもらったりもした
いつかお姉ちゃんと一緒に食べた
クリームシチュー。今度は
おねえちゃんの手作りだ
おねえちゃんの料理はそれはもう
世界で一番おいしいと思った



それからおねえちゃんと
一緒に生活が始まった
ぼくにとっては
すごく幸せな時間だった



ぼくは
おねえちゃんが
好きだ

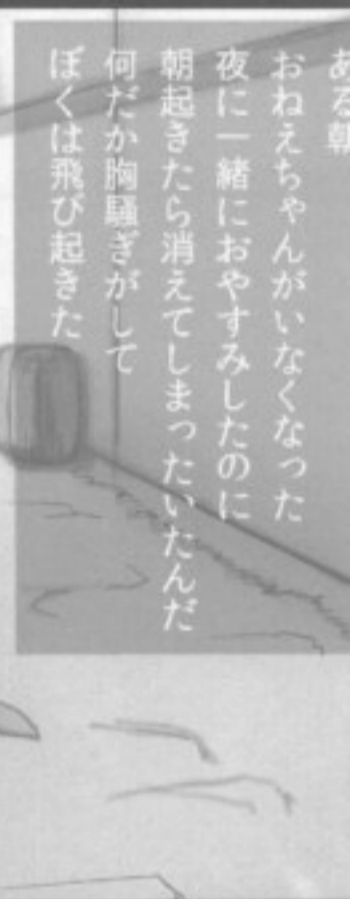


おねえちゃんと
このままずっと
一緒にいられたらいいなと
ぼくは思っていた



おやすみ
リッツ

うん
おやすみ
なさい





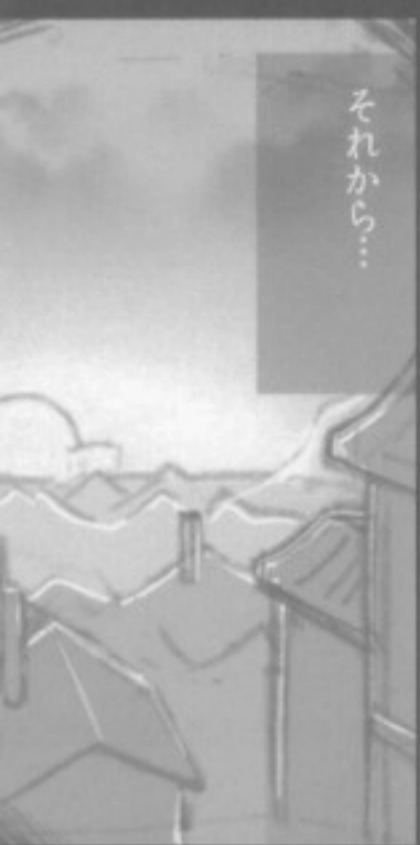
聞くと、ハンターのお仕事で
夜中の内に出かけたみたい
それならおやすみの前に
言ってくれたらよかったのに……
「ぼくもお手伝いしたい」というと
あっさり断られて、



……



おねえちゃんはいたって
いつもどおりの様子だった
何事もなかったみたいに
今日の事はいつたい
なんだったんだらうか……



それから……



うん



おやすみなさい
リッツ
また明日ね

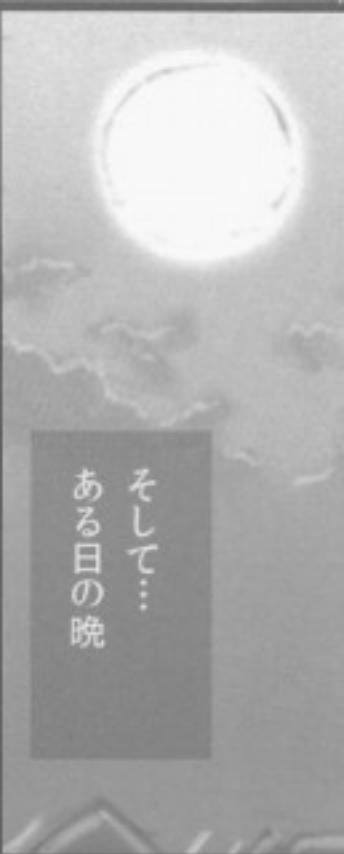


ぼくは空っぽのベッドを見て
無性に寂しくなった
ぼくはおねえちゃんと
一緒にいたかった……


……



毎晩おねえちゃんは
いなくなるようになった
毎日、毎日ー
朝起きるとぼくは
ひとりぼっちだった
おねえちゃんが戻ってくるのは
きまつて夕方から夜になった
そんなに長い間、毎日おねえちゃんは
何をしているんだらう……
おねえちゃんに聞いてみても
教えてくれないし……



そして…
ある日の晩



ぼくはおねえちゃんの
あとをつける事にした


眠いのを我慢して…

寝たふりをして待つてると


おねえちゃんが起きだして仕度をはじめた

月も上りきった、真夜中のことだった

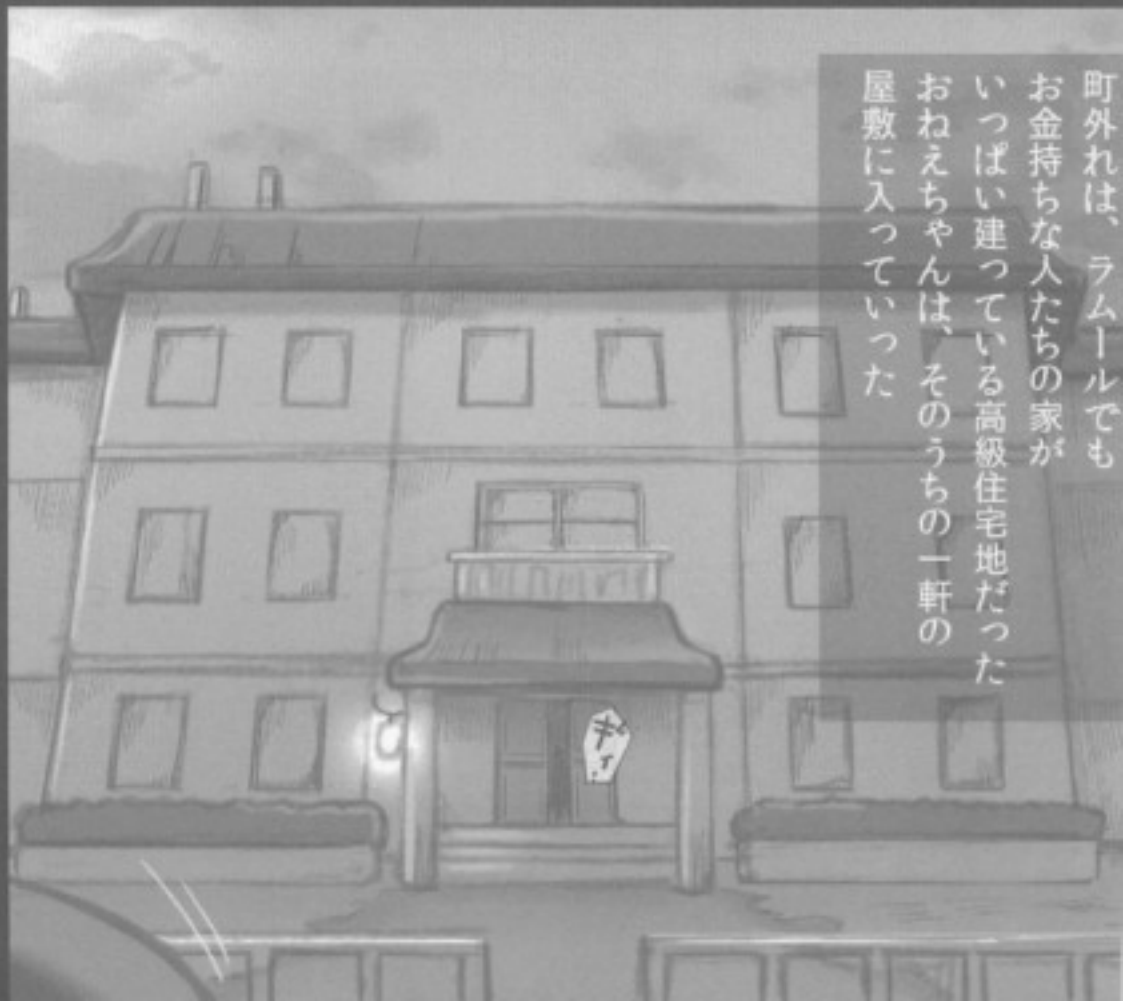
家を出たおねえちゃんに気づかれないように
ぼくもこっそりとあとに続いた




真夜中の町は静まり返って、
明かりひとつなく、真っ暗だった
真っ暗な道をおねえちゃんは
迷う様子もなく進んでいく
ぼくもおねえちゃん
を見失わないように注意して
あとについていった



おねえちゃんにとっては毎日毎日
通いなれた道なんだろうか…
暗い路地を抜けて、
そしておねえちゃんは
ぼくのあまり行ったことない
町外れのほうに向かって歩いていった



町外れは、ラムールでも
お金持ちな人たちの家
いっぱい建っている高級住宅地だった
おねえちゃんは、そのうちの一軒の
屋敷に入っていた



…
でっかい扉…



あたりを見回してみると
裏口のカギが
あいてるのに気がついたので
ぼくは屋敷の中に入
りてみることにした

家の人に見つかつたら
怒られそうだけど…
ぼくはおねえちゃんの事が
気になって仕方がなかつた
中には人の気配はなく、
ぼくはすんぽうと入

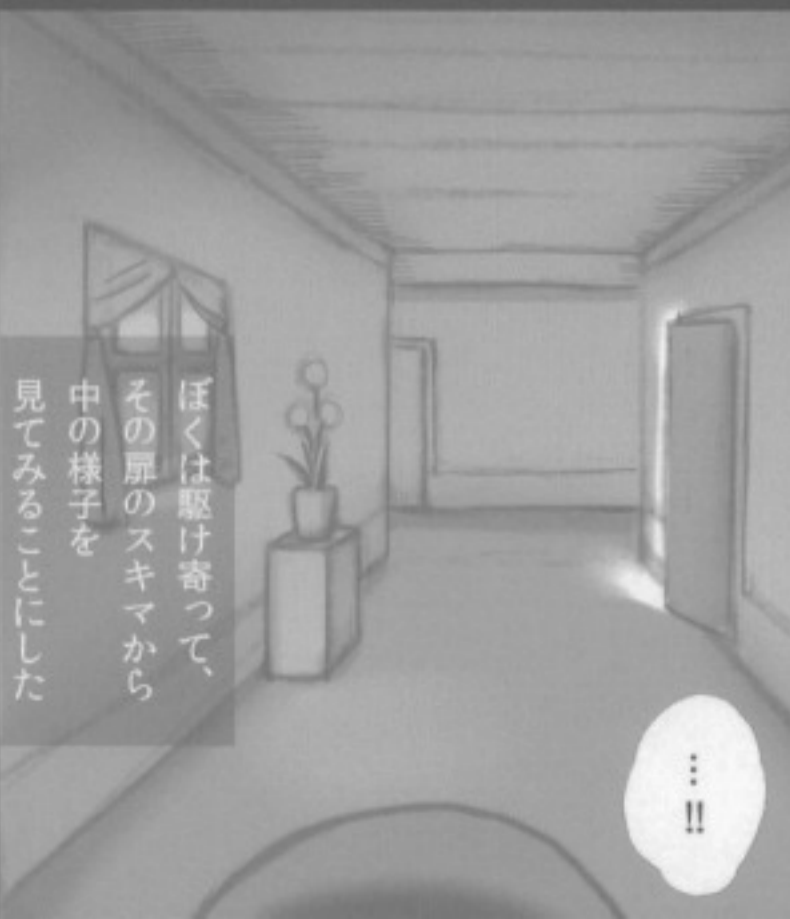


屋敷の中はすごく広かつたけど、
明かりはなく真つ暗で
人は誰もいなかった
ぼくは広い屋敷の中を
おねえちゃんを探して回ることにした

ぼくはおねえちゃんのことを考えた
おねえちゃんを見つけたら…
怒られて、追い返されるかもしれない
ハンターの仕事って危ないし、
大変なのはわかつてる

でも、ぼくは
おねえちゃんの役に立ちたかつた
少しだけでもできる事があると思うし
それに、お姉ちゃんのそばにいたかつた

おねえちゃんを思いながら
真つ暗で長い廊下を
ぼくはひたすら進んでいった



そして、長い廊下の突き当たり
とある部屋から
明かりがもれてるのに気がついた
少しだけど、人の声も聞こえてくる
あそこにおねえちゃんがいるんだろうか

ぼくは駆け寄って、
その扉のスキマから
中の様子を
見てみることにした

そして、ぼくは
おねえちゃんを見つけた

あ…っ

…!!

んああっ！

ギシ

はあんっ

はっ…

おねえちゃんにはベッドで
知らない男の人と裸で
抱き合っていた…

ギシ

あっ

キッ

んっ

ギッ

んっ

キッ

ツ！
おね……

相変わらずの腰使い…
いや、ウデをあげたようだな
リーザ

…あ
ありがとう
っさいますっ

んっ

ふっ

まあ君の体のおかげで
私どもは協力を
惜しまないことになりそうだが…
かわいい顔して…
とんだ魔性の女だ

しかし世直し勇者ご一行も
大変だな、世界を救うため
こうやって協力者を
体で募らねばならんとはな

プリン

んんっ

いや、
そもそも魔女だったか
ホルンの魔女…

あの男は…前に
見たことある気がする
確か「セイジカ」とか
「ギイン」だったか…
その男のちんちんが
おねえちゃんに刺さっていて
おねえちゃんの
切なそうな声がひびいている

二人が何をしてるのか
わからない…
ぼくはおねえちゃんを
助けたかったけど
二人にはなんだか
近寄れない感じがして
ぼくは見ていることしか
できなかった



んはあっ

ンッ

ふうっ

く…っ

ぐちゃぐちゃ



おねえちゃんと男は
キスをした
憧れだったおねえちゃんの
やわらかな唇…
あの男はそれに今
乱暴にしゃぶりついている

長い間…一分も二分も
おねえちゃんと男は口付けしあって
ぎゅっつと抱き合いながら
ベッドの上でごろごろしていた



んんッ…

しゅっ

ちゅ♡

んっ

ギラ

ギラ

ふう

んふう

ギラ

ギラ

ギラ



おねえちやんと男の体が
激しくぶつかり合い
優しくこすれ合い…
長い間、ほくは
ずっと抱き合う二人を
扉の外から眺めていた

売女がつ!
気持ちいいんだろ?

こんなに股を濡らして
鳴きおって!

一番奥に出してやる!
ありがたく受けとれっ

んあッ

あ…はああッ…

くはあッ



男に言われるまま、
おねえちやんは男におまたを…

今までちんちんが入っていた
ところを目いっぱい広げて見せた
おねえちやんの中から
何か白い汁がたくさん
あふれ出てくるのが見えた

…ふうう
年甲斐もなく
熱くなってしまうた

ほら、
見せなさい

はっ♥

ハッ

これはこれは…ハハ
まいったな、一回戦で
こんなに搾り取られて
しまうとはな

はっ

あッ



やだ…すこい♡
こんなにいっぱい…



そしておねえちゃんの顔…
それは恥ずかしそうで
照れくさそうな
ぼくの今まで
見たことない笑顔だった

おねえちゃんは…
足をめいっぱい広げて
男に、自分の
恥ずかしいところを
見せつけていた

…っ



あんっ♡

クチュ



あっ…♡

白い汁でぐちゃぐちゃになってる
おねえちゃんのおまたに
男のちんちんが入っていくのが
見えた

そしてすぐにまた二人は
抱き合い始めた
ぼくは見てることしか
できなかった…

んっ
ありがとう
ございます

なに、まだまだ
ごちそうしてやるぞ
さあ、来なさい

でも、そうじゃないみたい…
おねえちゃんは、
自分に乱暴した男に体を開いて
笑顔振りまいていた
ぼくの知ってるのとは
全然違う笑顔を

ぼくはおねえちゃんの
本当の姿を見てしまった…
仕事のために
イヤイヤやってるのかも…
そうだったらぼくが
おねえちゃんを助けなきゃ
ぼくはそう思いたかった



突然廊下の奥から
人が歩いてくるのが見えた
ぼくはおねえちゃんを置いて
その場をにげ出した



…!

カッガッ

家に逃げ帰ったぼくは
ベッドにもぐりこんだ
でも…
とても眠れそうにはなかった



おねえちゃんの事しか
考えられないのに
おねえちゃんの事を思うと
すごく胸が苦しくなった



翌日ー



いつの間にか寝てたぼくが
目が覚めたのは、
もうお昼過ぎ
日も高く上りきったころだった



でも、
おねえちゃんのベッドは
空っぽのままだった
おねえちゃんはまだあの男と
一緒にいるんだろうか…



リーザおねえちゃん
ぼくの大好きなおねえちゃん

いつもぼくに見せてくれる優しい笑顔と、
男と裸で抱き合いながら見せたあの笑顔
どっちが本当のおねえちゃんなんだろう

一人きりの部屋のベッドの中で
ぼくはそんな事を考えていた

おねえちゃんに戻ってきてほしかった
おねえちゃんと一緒にいたかった

でも、それは
何だか無理な事に思えて
ぼくは悲しくて
たまらなくなつた…

それから毎日毎日
おねえちゃんも男の家に通った
そしてぼくも
おねえちゃんの後を
ついていくようになった

今日の相手もまたあの男
もう一時間以上も
おねえちゃんと男は
体をぶつけ合っていた



ヒッ
ヒッ

ヒッ
ヒッ

ふうーっ



ああんっ

あはっ

ブル
ブル

ブル
ブル

んぎゅっ……

はあッ



そんなおねえちゃんの
かわいそうな姿を
ぼくは毎日毎日眺めている
悲しくてたまらないはずなのに
何でだろう……



んぎゅっ

んっ

んっ

じゅぽ
じゅぽ

じゅぽ
じゅぽ



ん……

じゅぽ
じゅぽ

じゅぽ
じゅぽ

おねえちゃんは今まで自分の
おまたやお尻の穴に入っていた
男のちんちんを、口でくわえてる
ぼくはその様子を
窓の外から見てるだけ



はっ
はひいっ……!

はっ

んああッ

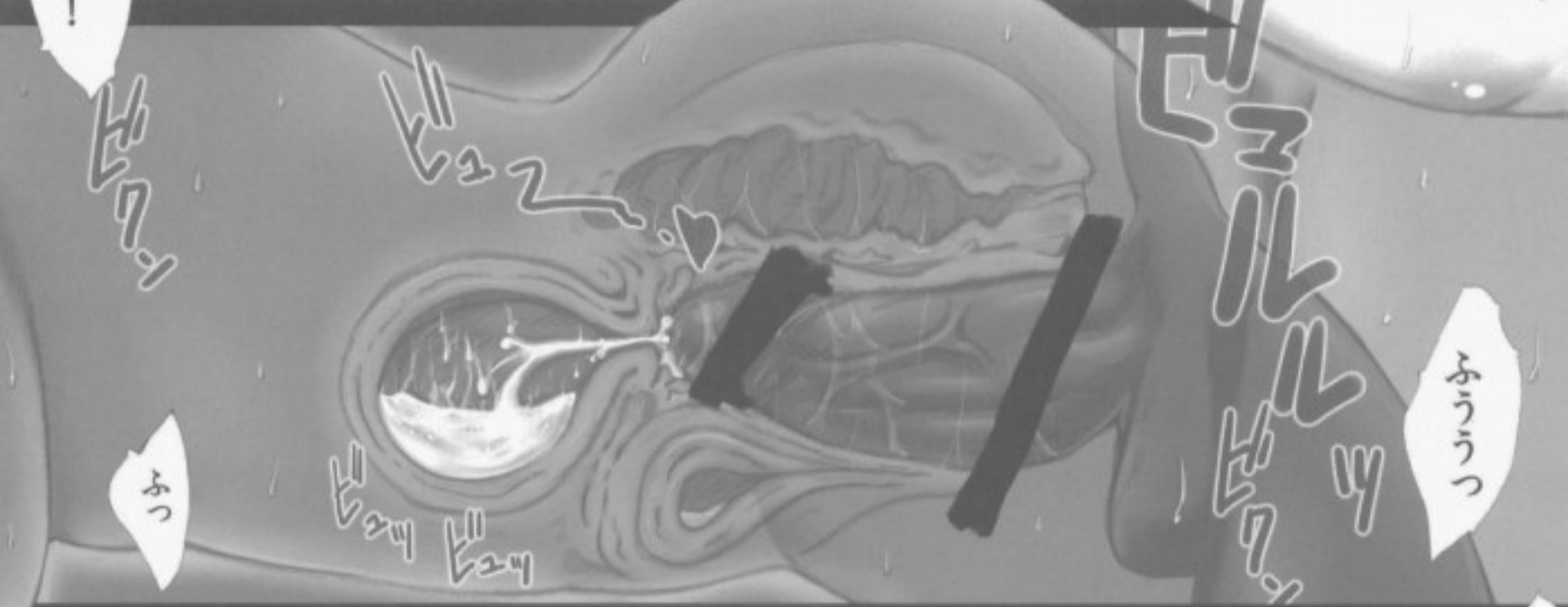
はあッ

は……ッ!

ガッ
ガッ

ぐちゅ
ぐちゅ

ぐちゅ



はっ

はっ
はっ

はっ

はっ
はっ

はっ
はあッ

はあッ



……



寄り添って静かに眠る二人
窓の外までひびいてた
おねえちゃんとの男の声は
もう聞こえない

ぼくは
その場を後にした



ハアッ

ハッ

はっ
はあッ

ハアッ

はっ

おねえちゃんが来てから
1週間：2週間と過ぎていった

おねえちゃんは毎日男のそこへ通ってる
最近は帰りも遅くなって、
夜まで帰らない事も多くなった
丸1日帰ってこない日もある



今日ももう日が沈むけど
おねえちゃんはまだ帰らない
ぼくはおねえちゃんの事を思った



たまたまなくなってくるけど
何でだろう、おねえちゃんの事を
考えずにはいられなかった

下回身。



んふっ!

ふっ

んん...

おねえちゃん...
まだあの男のベッドの中にいるのかな
今何をしてるんだろう
考えるほど、



おねえちゃんのその姿と
安らかな寝顔を見て
ぼくは胸がはり裂けそうになった



...
おねえちゃん...



ある時ぼくが
ホルンの手伝いから帰ると
ベッドでおねえちゃんが
眠っているのを見つけた
おねえちゃんの姿を見るのは
2日ぶりの事だ

おねえちゃんの姿はひどいものだった
髪はほどけて、服は乱れて
白い肌はどこどころ汚れがついてたし
何だかヘンなおいもした
男に乱暴されたまま
追い出されて、疲れ果てた体で
ここまで帰ってきたんだろうか



でもおねえちゃんの仕事は
毎日同じものだった



んあッ

あッ

ひあッ!

やッ



今日もぼくは
おねえちゃんが
知らない家の中に
知らない男と一緒に
入っていく様子を
こっそりと見守ってる



.....



あッ

んあッ



おねえちゃんは三人の男にもてあそばれていたしかも、多分ぼくと同じかちよつと上くらいの年の男の子たちに

ある日
ぼくは最初の男の家で
とんでもないものを見た
最後におねえちゃんが
出かけてから
3日経った夜の事だった



あいつらは...
おねえちゃんを
おもちゃか何かにし
か
思
つ
て
た
い
な
い
だ
つ
た



ハハ

ま、
ドレイってやつ?

んくっ



もつとカゲキに
やってもいいぜえ

オヤジが何やらせても
大丈夫って言うてたしな



おねえちゃんの
かわいそうな姿と
男たちの笑い声が
ぼくの頭に焼きついた



ほらほらー
止まるんじやねーよ

ムチ入れないと
わかんねーか? ハハ



んふー

んふっ

ブルッ
ぶっ



おねえちゃんと言った
おねえちゃんの仲間たちは
今も世界のどこかで戦ってる
ロマリアに苦しめられてる人たちに
助けるために

私がんばれば、それは
そんな人達を
助ける事につながると…
私は故郷を、大切な人を
ロマリアによって
失ってしまった…

ほかの人には、私と同じ思いを
してほしくない

そうならうとしてる人達を
助けたいんだって…

それがおねえちゃんの思い
そのためにはお姉ちゃんが

ぼくは
わからなくなってしまった…
おねえちゃんに
あんな事を続けてほしくない…

ずっとぼくと一緒にいてほしいって
そう思うけど、それはぼくの
わがままなのかも…

ぼくが何もいえないまま
おねえちゃんとの
二人の時間は
過ぎていつてしまった

おやすみなさい
リッツ

また明日ね

おやすみしたくない…

おねえちゃんが
また行ってしまおう

おねえちゃんと
一緒にいたいのに…

……うん

おやすみ、
おねえちゃん

……

おねえちやんは男のもとへ出かけ
ぼくはまた
おねえちやんのあとをついてきた
今日は最初の男の家だった

でも何だか
いつもと様子が違う
広い庭にはたくさんの
黒い車が停まっていた
車って、ラムールでは
かなり珍しいけど……

ぼくがいつもの
部屋に向かうと
部屋の明かりと
人の話し声も聞こえてきた



ヒョコ

広い部屋の中には、
たくさん男の人達が
集まっていた
15人…20人
くらいだろうか

皆、裸手前の格好で
全員マスクで
顔を隠してる…
すごくヘンな雰囲気だった



おあっ



ぺたっ

皆さん、
お待ちせ致しました



久しぶりですな
この手の催しも

例の娘
らしいですよ
ホルンの

おねえちやんは
どこいったんだろうか

ご覧のとおり
本日は極上品ですぞ

たつぷりと
お楽しみください

よ、よろしく
お願いいたします

ほほお…

いや
これは見事な

部屋の中におねえちゃんが、
あの男に連れられて
入ってきた
まさかこれから
この大勢の人たちの
相手をするんだろうか

おねえちゃんは沢山の男達の前で
裸をさらしている
周りからの視線や声に
おねえちゃんは恥ずかしそうな、
嬉しそうな顔を見せた

おねえちゃんのおっぱいには
…良く見るとおまたにも
ピアスが付けられていた
今日のためにあの男が
付けさせたんだろうか…

さ、リーザ
楽しいイベントの
始まりだ

挨拶なさい

うほほ

…っ♡

アッ♡

…は♡

ホルンの
リーザと申します
本日はお集まりいただき
まことに
ありがとうございます

また皆様方には、
私どもに
大きなご支援をいただけるとの事で
感激の極みでございます

本日はそのご恩に対しての
心ばかりのお礼の催しです

りり…

スツ…



皆様のお相手は私
リーザが
精一杯つとめさせて
いただきます

皆様のご要望は
どのようなものでも全て
誠心誠意
応えさせていただきます

どうか皆様
心ゆくまで
お楽しみください

おねえちゃんの挨拶が終わると、
部屋の中で大きな歓声が上がります
そして男達はいつせいに
おねえちゃんに群がっていった





部屋の中にはいろいろな道具があつて男達はそれを手に取るとおねえちゃんをおもちやにし始めた

おねえちゃんを縄で縛りムチで叩き、ろうそくを当てたりどんがった木の上に座らせたりもした

んふッ

んんーっ



おねえちゃんがかわいそうな姿になるたび男達は手をたたいて大声で笑っていたでもおねえちゃんは...いつもより大分苦しそうだけでもそれを全て受け入れていた

道具で一通り遊んだ後、男達は
へトへトになったおねえちゃんを立たせると
一人ひとりちんちんを差し込んでいった
おねえちゃんのお尻が叩かれる
パンパンという音が
窓の外にもひびいてくる

一人の男がちんちんを引き抜くと
おねえちゃんのおまたからあの白い汁が
こぼれ出てきた
その穴にまた別のちんちんが入れられ…

おねえちゃんは、
立ったままの格好で
長い時間をかけて
全員分のちんちんを
受け入れる事になった

ああ…

うんんッ

ンッ

くっ

ギチ

ヒッ
コッ

ドクン

ドクッ

ドクン

グ
グ
グ

ヒッ
コッ

ヒッ
コッ

はへえ〜…

んあはあッ!

はあッ

ガク
ガク

ハッ
ッ

ド
ド

IP
IP
IP

IP
IP

IP
IP

IP
IP

IP
IP

その後おねえちゃんは
ベッドに寝かされ
おまたとお尻の穴、口に
それぞれちんちんを
入れられ始めた



ハア…あ

ヒュルル

ぐったりと疲れきった
おねえちゃんの全身と、
体の中に男達の



んふ

ふくううーっ

ズッ

ズッ

ズッ

ぶっ

ヒクッ

ヒクッ

ぐんぐん

ぐんぐん

んぐっ

グブツ!

プーッ

ぐりっ



おねえちゃんは
しばらく気を失ってた
みたいだったけど
気がついたとき、
男に貫かれながら見せた表情は

たしかに笑顔だった
ぼくは男達と、
全身をどろどろにさせながら
悦び合うおねえちゃんの姿を
目の当たりにした…

ふはあっ

あっ

っは

ヒクッ

クヒヒ

ヒッ

ヒッ

はああん…

ヒッ

んあああ

ゴッ

ギキッ

ギキッ

ギッ

BOKU TO
LIEZA ONECHAN



PRESENTED
BY
GREAT acta